

渾天壹統星象全図

宮島 一彦*・平岡 隆二**

概要

この星図は中国・清朝の道光年間に刷られたものであるが、中国にはほとんど残存しないのに対し、日本で何枚か見ついている。いずれも青色地(下記松浦史料博物館のものは黒)に白抜きで、文字や星座が示されている。

大きく分けて、道光2(1822)年と道光6年の2つの版(便宜上A、Bとする)があるが、そのうち道光6年のものは説明文・星図部分・識語が同じでありながら、末尾が暮春・松涛書および孟夏・銭泳書となっている2つの亜種(B、B')に分けられることが、著者の1人(宮島)の調査によって明らかになっている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。

星図そのものはA、Bとも宋代の石刻・淳祐天文図に少し西洋天文学的要素を加えたもので、最外円の太さ等の細部を除いて、ほとんど違いはないが、説明文はBが淳祐天文図とほぼ同じであるのに対し、Bより古いAのほうは西洋天文学の内容が盛り込まれている。

このたび著者らが調査した大村市立史料館所蔵の同題の星図は、道光2年のものであるが、従来知られていたのと同じ雲遊散人識語のものであり、星図も同じ(色はやや薄い)であるが、文章の部分が、従来のものの途中までしかなく、いわばA'とでもすべきものである。この星図は大村藩天文方峰源助を出した峰家に伝わるもので、この題の星図で江戸時代の天文学者とかかわりがうかがわれる唯一のものである。また、平戸市・松浦史料博物館にもほぼ同様の星図(文章部分は黒地)が所蔵されている。

1. はじめに

著者の1人(宮島)は、昨年、もう1人の著者(平岡)から、長崎県大村市立史料館に標記の題(「壺」は「壹」、「図」は「圖」が用いられているが、本論文の本文中では旧漢字は現代漢字に直して表記する)の星図があることを知らされ、9月に合同で調査を行った。その結果、従来知られていた同題の星図のうち1822年の版の亜種(A')であることが分かった。また、同館の山下和秀氏より、長崎県平戸市の松浦史料博物館にもこれに類似する星図があるとの教示を受けた。後者については、今年度に改めて調査することとし、ここではこれまでに調査した同題の星図について述べることにする。なお、文献(1)(2)(3)の記述内容を一部修正した。

2. 渾天壹統星象全図の概要(稿末写真参照)

これらの星図は青色地に白抜きで字や星などが表されており、従来知られていたもののほとんどは細い縦長の8枚の紙からなっている。枚数の少

ないものは、大村市・平戸市のものを除き、そのうちのどれかが失われたものと考えられる。右端の1枚には表題が篆書で書かれている。

星図は北極を中心とする円形星図で3~6枚目に描かれており、星およびそれらを結んだ星座と天の川は中国・蘇州に現存する南宋・淳祐石刻天文図(以下、蘇州図と略記)のほぼ敷き写しであるが、蘇州図に脱落している星座が補われている。また、北極を中心とする同心円は、蘇州図のばあい内側から順に上規(内規とも。周極星となる限界の赤緯円。現代天文学では常現圏)・赤道・下規(少しでも地平線上に昇る限界の赤緯円、常隠圏)であるのに対し、本星図では内側から順に、天頂を通る赤緯円・北回帰線・赤道・南回帰線・常隠圏となっており、それぞれに「天頂」「夏至黄道南距赤道二十四度」「赤道春分/赤道秋分」「冬至黄道北距赤道二十四度」の文字が添えてある。5番目の円(常隠圏)には何も書き添えられていない。この常隠圏とその外

*中之島科学研究所研究員/同志社大学嘱託講師 miyajimakz@beige.plala.or.jp

**熊本県立大学文学部准教授 hiraokaryuji@hotmail.co.jp

の円の間にこの幅は蘇州図より狭い)に天を二十八宿という28の星座によって不等分割した時の星座名とその広さ、その外の円との間(蘇州図とほぼ同じ幅)に十二支(天を十二等分して十二支名を配当)・十二次(その別名)・分野(十二次に対応する地方)が記入されている。この外の最外周に太めの円が描かれている。

2~7枚目には、星図を囲んで、天文学的内容が記されている。

8枚目には出版の理念などを述べた識語が隸書風の文字で記されている。

一見互いによく似ているが、天文学的記述の部分および識語に、大きく分けて、中国・清朝の道光2(1822)年のもの(Aとする)と、6(1826)年のもの(B)の2種類があり、Bはさらに識語と表題部分の違いにより、BとB'の亜種に分かれる。

3. 道光2年版(A)

筆者が、藪内清先生から譲り受けた星図は、道光2(1822)年識語のもので、縦約122cm×横約28.7cmの紙8枚からなっている。金光図書館所蔵のものや兵庫県中富村の辻良彦氏の家に伝わるものも1822年の版であり、いずれも表装されておらず、8枚の大きな短冊状の紙片のままである。

B・B'とは、まず円形星図の最外周の円の太さが違う。識語の内容も全く違い、1822年のものは雲游散人識となっているが、号だけで本名は判らない。散人とは自己を卑下した呼称だという。星図そのものはほとんど同じだが、詳しく見ると微妙に違う。1826年のものは1822年のものを基にして復刻したもののようと思われる。

最も異なるのは、星図の周囲に記された天文学的記事である。1822年のものは、伝統的な中国の宇宙観や天文知識と、新たに入ってきた西洋天文学の知識(同心天球説など)とを折衷したような内容で、上下2段に分けて書かれているのに対し、出版年の新しい1826年のもののほうが、かえって古い伝統的な内容になっており、前に述べた蘇州の淳祐石刻星図の下半分に刻まれた文章とほとんど一致する。星図の上下の部分だけが2段になっていて、上段から下段に続き、その最後から次の行の最上部に続く。

識語は次の通り(旧漢字は現代漢字になおす)。

老子不出戸知天下。不窺牖見天道。余觀地理圖。如身歷九州。了然於心目之間也。楊子通天地。人謂之儒。然則天文地理。儒者固不可偏廢也。今地輿刊版。既多甚行於世。而天文流傳未廣。豈不為芸林之欠陷乎。爰檢[草冠+匚]中有旧蔵天文図稿。取而刻諸石。庶幾博雅君子所共

楽也。道光二年青龍在元默敦牂升建寿星合朔後三日雲游散人識。

老子は部屋から出なくても世の中のことが分かり、窓からのぞかなくても天の理法(あるいは天体の運行)が知れた(『老子道德経』下篇第47の言葉)。私は地理図を観て、自分が国中を歴訪しているかのようで、はっきりと心の目に浮かんだ。楊子(後漢の揚雄。揚は楊とも書く)は天地のことに通暎していて、人々はこれを「儒」と称した。だから天文地理というのは、儒者は本来捨て置くわけにゆかないのである。今、大地のことについての出版は世間で多く行われている。しかし天文の普及は広くない。これは学問の欠陥ではないだろうか。ここに、本箱の中に以前から所蔵している天文図稿があるので、これを石に刻む。願わくは、博雅(学問が広く行いが正しい)の君子がみんなして楽しめんことを。道光二年壬午(青龍は太歳。「元默」=げんもく=は正しくは「元[黒+戈]」=げんよく。十干の壬の別称。「敦牂」=とんしょう=は十二支の午の別称)三月(升は斗に同じ。斗建は北斗の柄の指す方角。寿星は天の十二次分割の1つで十二支の辰にあたる。ここでは地上の方角で、柄が辰の方角を指すのは3月)3日(朔が1日)。雲游散人識す。

これで見ると、石板に陰刻して、拓本をとるように刷ったものと思われるが、筆者(宮島)蔵(藪内旧蔵)のものや、一昨年の入札会に出品されて別の古書店により落札されたものなどは、青地の上に白の絵の具で書いたようにも見える。

4. 道光6年版(B・B')

道光6(1826)年のものはまた、左端の識語の最後に、暮春(太陰太陽暦の3月)松涛(これには楊懷義という印も押されている)書とあるもの(B)と、孟夏(太陰太陽暦の4月)銭泳書とあるもの(B')との2種類に分かれる。松涛のもの銭泳のものとを比較して違っているのは、上に述べた出版時期と書者名、および識語の字体(文章は同じ)、表題(上記のようにどちらも篆書)のうちの「図」の字の字体だけ(松涛のものBはAと同じ)で、表題のそれ以外の字体や円形星図の周囲に記された天文学的記事・星図はまったく同じである。かつては、著作権という意識がなかったから、出版者名だけ変えて同じ原版を使って出版することはよくあった。

京都の岩倉実相院(B', 2枚ずつ一曲とした四曲の屏風)や津山郷土博物館にあるもの(B、軸装)、および思文閣古書資料目録第121号(1989)に掲載されたものは1826年の版である。表装してあり、思文閣のものは目録によれば縦136cm×横228cm、

津山のものは筆者の調査では縦125.5cm×横219.5cmで、少し大きさが違うが、これは表装の際に縁をどれだけ切り取ったかによる違いである。昨年、京都市内の民家で1826年のものと思われるものの現存が確認された。両端がなく(したがってBかB'かを判別できない)、6曲の屏風になっている。

以前長野県の博物館で開かれた展覧会に1つ出品されていたというが、それが上の何れかと同一のものか、別のものかは分からない。

アメリカのアドラー・プラネタリウム館にも1つ所蔵されているが、これは左端の1枚が欠けているため、蘇州・淳祐石刻天文図との類似から、宋代のものとの誤解されたようである。「図」の字体からB'であることが分かる。“Sky & Telescope”(Stephenson, Feb., 1999)誌の写真をみると、右から7枚目に置くべき部分が誤って2枚目に置かれている。

Aの識語にもあるように、しばしば天と地は対比して扱われる。天球儀と地球儀もそうであるし、天文図(星図)と地図も同様である。岩倉実相院には、やはり四曲の屏風で青色地の「大清万年一統地理全図」(道光5年)も所蔵されている。

思文閣出版の目録以後も、古書目録に2度ほどこの種の星図が掲載されたことがある。

『中国古代天文文物図集』『中国古星図』や潘籟氏の『中国恒星観測史』など、中国で出版された研究書や学術雑誌には言及されていない。潘氏は戦前所蔵していたというが、現代中国では所在が確認されていない。その意味でも、日本に7～8点(アメリカに1点)現存することは貴重であると同時に興味深い。それ以上に、1622年版において西洋天文学がどのように受容されているか、1626年版でなぜ古い伝統的内容に逆戻りしたのか、興味もたれる。

日本に現存するもののうちのいくつかは明治時代以降にもたらされたことがわかっており、いくつかは江戸時代にもたらされたものであると思われる。次に述べる大村市のものはほぼ確実に江戸時代から伝えられてきたものである。

5. 大村市立史料館・道光2年版(A')

右端の表題と左端の識語はAと全く同じである。星図とその周りの天文学的記事は4枚しかなく、計6枚がひとつながりに表装されている。同館が購入した時には軸装であったが、その後現在の額装に補修されたとのことである。

天文学記事はAの途中、ちょうど半分くらいの「十二分野」まで、「九天」の前までしかなく、「緯星」の条を除いて、そこまではAと全く同じ内容である。緯星の条はごく簡略になっている。そのため、枚数

がAより少ない4枚に収まっているのである。したがって文の折り返しも、Aとは位置が異なっている。つまりこの図はいずれかの部分が失われて6枚になったのではなく、はじめから6枚なのである。なおBも説明文は十二分野までである。

星図以外の青色はA,B,B'と同じであるが、中央の星図の色はそれより淡い色合いになっている。星図そのものはAとほぼ同じであるが、微妙に違う。それを縁取る白抜きの円の幅は約2.5～2.8cmでA(1.1～1.4cm)より広い。

全体の大きさは縦121.7×横155.2cmで、当然、他のバージョンより横が短い。4枚目右端で星図円の直径(青い部分の)を測ると約92.8cm(3枚目左端より大きい)で、A(92.4cm)より僅かに大きい。「渾」字の縦の大きさは12.5cmで、これもAの12.3cmより僅かに大きい。

これらから見れば、紙の伸縮も考えられるので断言はできないが、Aとは非常によく似てはいるものの、星図部分も新たに彫りなおしたようである。

この図が伝えられてきた大村藩峰家について次に述べる。

6. 大村藩峰家⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁷⁾と本星図

大村市立史料館の「渾天壺統星象全図」は、同館が古書肆を通じて平成11年度に購入したもののだが、かつては旧大村藩士の峰家に伝来した資料であったことが知られている。

峰家は、享保頃に活動した峰宇右衛門(諱は督。生没年未詳)以降、大村藩における天文暦学にまつわる御用を代々務めた家系で、その後、伝治(徳。1731-1802)、宇右衛門(厚。1789-1868)と続き、源助(潔。1825-93)のときに明治維新を迎えた。

峰家の旧蔵資料は近代以降に散佚したが、本星図と同じく大村市立史料館所蔵の大村藩峯家文書や、長崎歴史文化博物館の峰文庫、山下文書、古賀文庫などに、比較的まとまった分量が現存している。とくに長崎歴史文化博物館の峰文庫は、星図類では渋川春海・昔尹『天文成象』(元禄12年刊)の写本や石坂常堅『方円星図』(文政9年刊)などを架蔵するほか、望遠鏡1点、渾天儀2点、算木等の器物類、伊能図5点を初めとする絵図類、その他多数の和本・古文書類など、計約400点から成るすぐれた天文暦学コレクションである。本星図も、元はそれらの資料とともに峰家に保存されていたものが、ある時期に散佚したとみられるが、最終的に峰家由来の大村市の所蔵となって研究者の閲覧に供されていることはまことに慶事と言わねばならない。

本星図がどのような経緯で峰家の所蔵となったかは不明であるが、それが道光2(文政5・1822)年の成立であることや、近代以降の収集の可能性がほぼ消失し得ることなどを考えると、江戸後期の宇右衛門(厚)か、あるいは源助の代に入手したものとみて大過なからう。

宇右衛門は、師の瀧山伴治から暦術を学び、文化10(1813)年にその翌年の「甲戌年七曜暦」を藩主・大村純鎮に献上した。また天保11(1840)年には暦学方に取り立てられ、弟子の育成を命じられたが育たず、代わりに子の源助に稽古をつけ、念願であった源助の出府修行を実現させている。

また源助は、嘉永3～安政2(1850-1855)年に江戸の幕府天文方・渋川景佑(1787-1856/57)のもとで暦学修行を行って免許皆伝を受け、帰藩後は、大村藩領の総合調査書『郷村記』の総調役兼測量方に抜擢されて文久2年(1862)にその編纂を完成、また同年中に藩命により幕府派遣船・千歳丸で上海に渡航するなど、注目すべき業績を多く残した。

この二人のうち、宇右衛門の資料収集にまつわる記録はほとんど見当たらないが、源助については、江戸修行中に渋川景佑の蔵書から多数の写本を作成して大村に持ち帰っており、また江戸で独自に書籍を購入していた形跡もあるなど、峰家資料の充実に大きく貢献していたことは疑い得ない。例えば、峰文庫本『天経或問註解』(入江脩敬著。寛延3年刊)の奥付に「嘉永四年亥正月於東都求之／峯源助」と自ら墨書している。

ただし本星図との関連については確たる史料が得られず、これ以上の推測は差し控えることとし、今後の新史料発見を期待したい。

なお同家の姓の漢字は、先行研究のみならず一次史料でも「峰」「峯」「美祢」等の混用が見られるが、ここでは引用を除いて「峰」で統一した。

7. 松浦史料博物館所蔵のもの(A')

上記大村市立史料館蔵の図の調査の際、同館の山下和秀氏より、松浦史料博物館にも、同様の星図が所蔵されているとの教示を受けた。詳細は次回の調査に俟たねばならないが、非公式の写真で見える限りでは大村市のもものと酷似しており、A'に分類できる。ただ、天文学記事の部分が黒で刷られていることと、端のほうに文字の一部がみられる点が異なっており、あるいはA''に分類すべきかもしれない。

8. おわりに

以上に述べたように、わが国には異なる版の同名の星図が残っているが、それが出版された当の中国で

は残存が確認されておらず、貴重な史料であるといえる。また、AとBとのグループにおいて、出版年の早いAに多くの西洋天文学の知識が盛り込まれ、Bにはそれがほとんど見られないことも興味深い。大村市のものに関しては峰家とのかかわりを明らかにすることが今後の課題であり、松浦史料博物館のものとともに、今後の更なる調査が必要である。

津山郷土博物館の星図調査(1990年)は当時の故・森本謙三館長の依頼によるもので、多大のご協力をいただいた。また、このたびの大村市立史料館の星図ほかの史料調査時にもまた、大村市教育委員会学芸員の山下和秀氏より多大なご協力を頂いた。ここに感謝の意を表したい。

なお宮島の大村市の星図調査については、中之島科学研究所の出張費支給を受けた。

参考文献

- (1) K.Miyajima, 'Japanese Celestial Cartography before the Meiji Period', "the History of Cartography", Vol.2, Book 2, Chap.14, Univcity of Chicago Press, 1994.
- (2) 宮島一彦「日本の古星図と東アジアの天文学」『人文学報』京都大学人文科学研究所、82巻、1999年。
- (3) 宮島一彦「渾天壹統星象全図について」『同志社大学理工学研究所研究報告』43巻4号、2003年。
- (4) 平岡隆二「大村藩の学問：天文学」『新編大村市史：第三巻近世編』大村市、2015年。
- (5) 伊藤節子「幕府天文方渋川景佑と大村藩天文学者峰源助の学問的交流」、『国立天文台報』7巻、2004年。
- (6) 伊藤節子「大村藩測量方峰源助について」、『科学史研究』47巻(246号)、2008年
- (7) 平岡隆二・山下和秀・伊藤節子「峰文庫表紙裏張り文書の研究」『長崎歴史文化博物館研究紀要』第10号、2016年

【付】渾天壹統星象全圖・天文学記事釈文

参考文献(3)に付した釈文に少し手を加えたものを以下に示す。(3)においては「天漢」の前までを収録したが、今回は大村市のもの最後まで、すなわち、Aのほぼ半ばの「十二分野」の終わりまで、「九天」の前までを収録した。なおB、B'も「十二分野」までで終わっている。

1822年版を中心とし、26年版および蘇州図との異同を示す。

原文には句点がないが、補った。

渾天壹統星象全圖で陰陽反転して表されている文字はここでは影付き文字で示した。蘇州図では四角の枠で囲んで表されている。

ここでは現代漢字があるものも旧漢字のままとした。字がない場合は似た異体字で代用した。

割注はA,A'にはなく、B,B'および蘇州図にはある。ポイントを下げた1行で示した。

[...]1826年版と蘇州・淳祐石刻天文図にあり、22年版にない文字をこの中に示した。1826年版と淳祐石刻天文図で異なる場合は、26年版の文字に[〃]をつけ、後ろの〈〉内に淳祐石刻天文図の文字を示した。

{...}22・26年版の[〃]が蘇州図でこうなっている。

(...)22年版の[〃]が1826年版と淳祐石刻天文図では()内のようになっているばあい。1826年版と淳祐石刻天文図で異なる場合は、[]のときと同様。ただし、最初の表題は22年版・26年版とも「渾天壹統星象全圖」、蘇州・淳祐石刻天文図のみが「天文図」。

渾天壹統星象全圖{天文図}

太極未判。天地人三才函於其中。謂之混沌。[云者]言天地人渾然而未分也。太極既判。輕清者為天。重濁者為地。兼清帶濁(清濁混)者為人。輕清者氣也。重濁者形也。形氣合者人也。故凡氣之發見於天者。皆太極中自然之理。運而為日月。分而為五星。列而為二十八舍。會而為斗極。莫不皆有常理。與人道相應。可以理而知也。今畧舉其梗概。列之於下。[天體圓。地體方。圓者動。{而}方者靜。天包地。地依天。{是也。}]天體{渾圓}週(周)圍[皆]三百六十五度四分度之一。徑一百二十一度四分度之三。每度二千九百二十里有奇。常動不靜(凡一度為百分。四分度之一即百分中二十五分也。四分度之三即百分中七十五分也)。[天]左旋。東出地上。西入地下。其行甚速(動而不息)。一晝一夜行三百六十六度四分度之一。緣日東行一度。故天左旋。三百六十六度。然後日復出於東方。地體渾圓在天之中。常靜不動。其度數與天同。每度約計二百五十里有零。兩極天之樞也。如車之軸。戶之樞。諸星皆動。惟極星不動。北極常見而不隱。南極常隱而不見。以京師觀之。北極出地四十度。南極入地四十度。(徑二十四度。其厚半之。勢傾東南。其西北之高。不過一度。邵雍謂。水火土石合而地。今所謂徑二十四度者。乃土石之體尔(爾)。土石之外。水接於天。皆為地體。地之徑亦得一百二十一度四分度之三也。兩極南北上下之樞是也。北高而南下。自地上觀之。北極出地上三

十五度有餘。南極入地下亦三十五度有餘。)兩極之中。各(皆)去九十一度三分度之一。謂之赤道(赤道)。橫絡天腹。以紀二十八宿相距之度焉。[大抵兩極正居南北之中。是為天心。中氣存焉。其動有常。不疾不徐。晝夜循環。斡旋天運。自東而西。分為四時。寒暑所以乎。陰陽所以和。此後天之太極也。先天之太極。造天地於無形。後天之太極。運天地於有形。三才妙用盡在是矣。]日體(日)渾圓。徑一度。廼太陽之精。天行速七政行遲遲為速所帶。故日較天每日少行一度。一晝夜行三百六十五度四分度之一。積三百六十五日有餘。比天少行一轉而復。與天會是為一年。(主生養恩德。人君之象(象)也。人君有道。則日五色。失道則日露其慝。譴告人主。而儆戒之。如史志所載日有食之。日中烏見。日中黑子。日色赤。日無光。或變為孛星。夜見中天光芒。四溢之類是也。日體徑一度半。自西而東。一日行一度。一歲一周天。)所行之路。謂之黃(黃)道。與赤道相交。半入(出)赤道內(外)。半出(入)赤道外(內)。冬至之日。黃道出赤道外二十四度。去北極最遠。日乃出辰入申。[故時寒。]夏至之日。黃道入赤道內二十四度去北極最近。乃出寅入戌。[故時暑。]晝長而夜短。故時暑。春分秋分。黃道正與赤道相交。[當兩極之中。日出卯日入酉。]故時和而晝夜均焉。月體(月)渾圓。徑一度。廼太陰之精。其行最遲。一晝夜較日少行一十二度有奇。積二十九日有餘。比日少行一轉。而復與日會。是為合朔之時。日在上。月在下。或不同度。有南北之差。則無礙。若月與日同度。日光為月體所掩。則為日食。且月本無光。借日之光以為明。故初八上弦。月西近日。則西明。二十三日下弦。月東近日。則東明。是其驗也。日西月東。或日下月上。正相對照。謂之望相。望之時或南北有差。不同度。則無礙。若同度正相對照。而為地影所遮。歷家謂之闕虛。即為月食矣。所行之路。謂之白道。與黃道相交。出入黃道不過六度。亦如黃道之出入赤道也。(太陰之精。主刑罰威權。大臣之象。大臣有德。能盡輔相之道。則月行常度。或大臣擅權。貴戚宦官用事則月露其慝。而變異生焉。如史志所載月有食之。月掩五星。五星入月。月光晝見。或變為彗星。陵犯紫宮。侵掃列舍之類是也。月體徑一度半。一日行十三度百分度之三十七。二十七有餘一周天。所行之路。謂之白道。與黃道相交。半出黃道外。半入黃道內。出入不過六度。如黃道出入赤道二十四度也。陽精猶日。陰(陰)精猶水。火則有光。水則會(含)影。故月光生於日之所照。魄生於日之所不照。當日則光明。就

日則光盡。與日同度。謂之朔。月行潛於日下。與日會也。邇一遐三謂之弦。分天體爲四分。三分謂之遐三。邇日一分。受日光之半。故半明半魄。如謂爲初八日及二十三日。月行近日一分謂之邇一。遠日弓張弦。上弦昏見。故光在西。下弦旦見。故光在東也。衡分天中謂之望。謂十五日之昏。日入西。月出東。東西相望。光滿而魄死也。光盡體伏謂之晦。謂三十日月行近於日光體。皆不見也。月行於白道。與黃道正交之處。在朔則日食。在望則月食。日食者月體掩日光也。月食者月入暗虛。不受日光也。暗虛者。日正對照處。經星三垣二十八舍中外官星是也。〔計二百八十三官。一千五百六十五星。〕其星不動。附天而行。東出西入。與天齊運。三垣紫微太微天市垣也。二十八舍。東方七宿角亢氐房心尾箕。〔爲蒼龍之體。〕北方七宿斗牛女虛危室壁〔壁〕。〔爲靈龜〔龜〕之體。〕西方七宿奎婁胃昂畢觜參。〔爲白虎之體。〕南方七宿井鬼柳星張翼軫。〔爲朱雀之體。〕中外官星在朝象官。如三公〔台諸侯〕九卿騎官羽林之類是也。在野象如離宮閣道華蓋五車之類是也。〕其餘因義制名。觀其名則可知其義矣〔也〕。〔經星皆守常位。隨天運轉。譬如百官萬民各守其職業。而聽命於七政。七政之行。至所居之次。或有進退不常。變異失序。則災祥之應。如影響然。可占而知也。〕緯〔五〕星五行之精。木曰歲星。火曰熒惑。土曰填星。金曰太白。水曰辰星。併日月而言。謂之七政。〔他の2図ではこの後に長文あり〕天漢乃氣之英。水之精也。氣水上升。精華上浮。耀湧若流。名曰天河。亦名天漢。起於箕尾。過北方。經西方之宿。南至鶉火。而入地下。〔四瀆之精也。起鶉火。經西方之宿。而過北方。至於箕尾。而入地下。以下

二十四氣七十二候の話) 十二辰乃十二月斗綱所指之地也。斗綱所指之辰。即(ママ)一月元氣所在。(正月指寅。二月指卯。三月指辰。四月指巳。五月指午。六月指未。七月指申。八月指酉。九月指戌。十月指亥。十一月指子。十二月指丑。謂之建天之元氣。無形可見。觀斗綱所建之辰。即可知矣。)斗有七星。第一星曰魁。第五星曰衡。第七星曰杓。此三星謂之斗綱。如正月建寅。初昏杓指寅。平旦魁指寅。他月倣此。十二次乃日月所會之處。凡日月一歲十二會。故有十二次。建子之月。次名元枵。建丑之月。次名星紀。〔建寅之月。次名析木。建卯之月。次名大火。建辰之月。次名壽星。建巳之月。次名鶉尾。建午之月。次名鶉火。建未之月。次名鶉首。建申之月。次名實沈。建酉之月。次名大梁。建戌之月。次名降婁。建亥之月。次名陬訾。〕十二分野即辰次所臨之地也。在天為(爲)十二次。在地為(爲)十二國十二州。凡日月交食。星辰之變異。以所臨分野占之。或吉或凶。各有當之者矣。

写真1:宮島藏(藪内清旧藏)「渾天老統星象全図」(A)。

写真2:津山市郷土資料館藏「渾天老統星象全図」(B)。

写真3:宮島藏・蘇州淳祐石刻「天文図」。

写真4:大村市立史料館藏「渾天老統星象全図」(A')。

〔付記〕原稿の仕上げ前に熊本大地震が起こり、著者の一人・平岡が被災したため、仕上げは宮島一人で行った。それが原因の疎漏があるかもしれない。ご寛恕を乞う。

圖全象統壹而輝

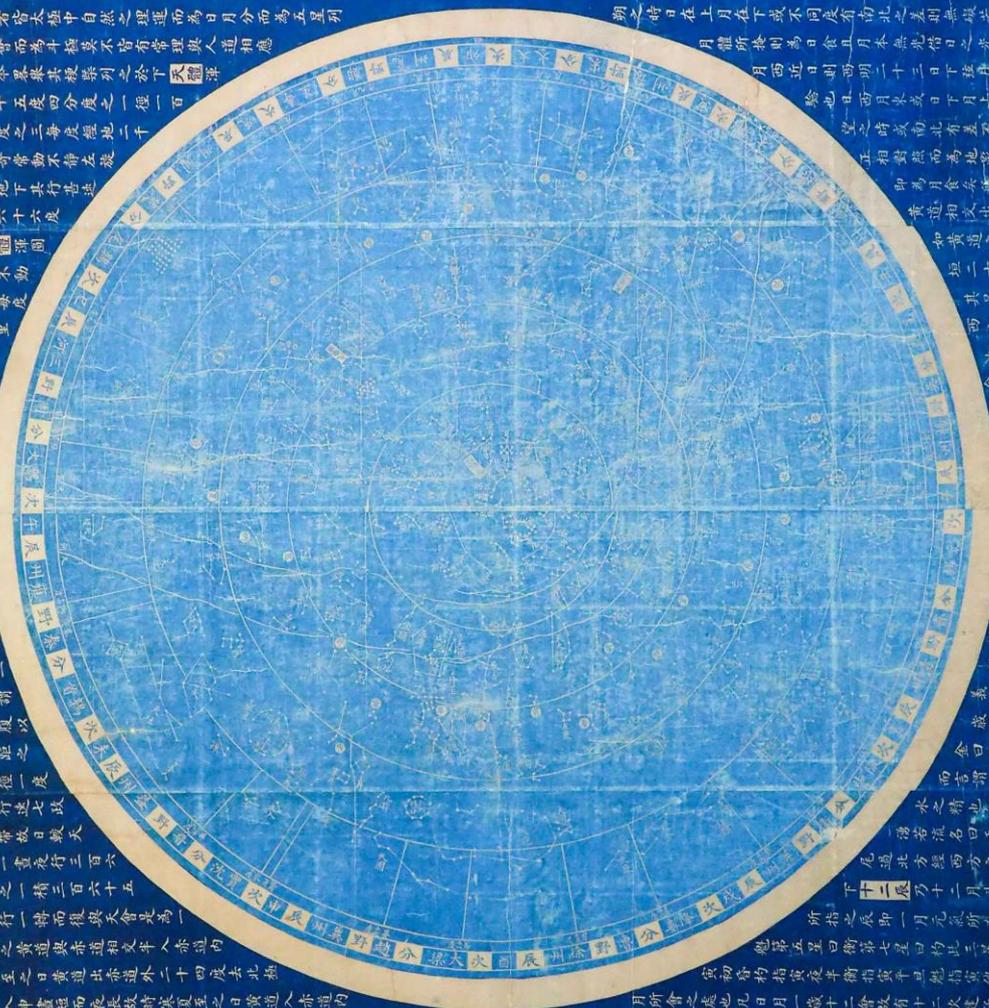
太極未判天地人三才處於其中謂之混沌言天地人渾然而未分也太極既判則清者為天重濁者為地輕清者為人輕清者氣也重濁者形也形氣合者也故凡氣之發見於天者皆太極中自然之理運而為日月分而為五星列而為二十八舍而為斗極莫不皆有其常理與人相通應可以理而知也余察其梗概列之於下

天圖 渾天圖三百六十五度四分度之一徑一百二十一度四分度之三每度經地二千九百二十里有奇常動不靜左旋東出地上西入地下其行晝夜一晝夜行三百六十六度四分度之一

地圖 渾天圖在天之中常靜不動其度數與天同每度約計二百五十里有奇

國圖 渾天之非也如車之軸戶之樞樞與音動惟極星不動北極常見而不像物極常隱而不見以象歸觀之北極出地四十度而極入地四十度而極之中各去九十一度三分度之一謂之赤道極星天復以紀二十宿相距之度

圖 渾天圖徑一度地太陽所行度七政行遲遲為遲所帶故日數天每日少行一度一晝夜行三百六十五度四分度之一積三百六十五日有餘天少行一轉而復與會是為一年所行之路謂之黃道與赤道對天年入赤道內北出赤道外冬至之日黃道出赤道外二十四度去北極星遠日乃出赤道入赤道極而夜長故時寒夏至之日黃道入赤道內二十四度去北極最近日乃出赤道入赤道長而夜短故時暑春秋分黃道正與赤道相交故時和而晝夜均焉



月圖 渾天圖徑一度地太陽之精其行最遲一晝夜行少行二十二度行時有二十九日有餘此日少行一轉而復與日會是為合朔大抵天則行速近地則行遲月最低故行最遲其合朔之時日在上月在下或不同處有南北之差則無嫌若其日同度日光為月體所掩則為日食且月本無光借日之亮以為明故初八上弦月西近日則朔明二十三日下午後升東近日則朔明是其所也

也七西月來或日下月上正相對則謂之望相望之時或南北有差不同度則無嫌若同度正相對然而高視影所遮度家謂之闕虛即為月食矣所行之路謂之白道與黃道相交出入黃道不過六度許如黃道之出入赤道也

三垣 二十八舍中外官星是也其星不動附天而行東出西入與天齊運三垣紫微太微天帝垣也二十八舍東方七宿角亢氐房心尾箕北方七宿斗牛女虛危室壁西方七宿奎艮寅卯辰參商方七宿井鬼柳星張翼轸中外官星在朝象宮也三舍元卿宮明林之類星也在野象物雜切魚鱉之類是也其餘則善制名觀其名別可知其義矣

五星 五行之精木曰歲星火曰熒惑土曰鎮星金曰太白水曰辰星日月而謂之七政

天 乃氣之精也氣水上升精華上清理一清苦澆名曰天河亦名天漢起於箕尾過北方經西方之宿南至斗火而入地

十二辰 乃十二月斗綱所指之地也斗綱所指之辰即一月元氣所在斗有七星第一星曰觀星在星曰御星七星曰杓此三星謂之斗綱如正月建寅初春物始發夜半御指寅斗杓指卯他月依此

十二次 乃日月所會之處也凡日月一歲十二會故有十二次建子之月次名元枵建丑之月次名析木建寅之月次名營室建辰之月次名青丘建巳之月次名大梁建午之月次名壽星建未之月次名西陵建申之月次名丹水建酉之月次名咸池建戌之月次名天門建亥之月次名虛梁

老子不出戶知天下不窺見天道余觀地理圖如身歷九州然於心也今地輿刊版既多甚於世而天文流傳未廣益不為藝林之缺陷廢也

子爰撿葺中舊藏天文圖稿取芻剞諸石庶笑博雅君子所共樂也

道光二年青龍在元默敷洋升建壽星合拜後三日雲游散人識

写真4